（様式５）　　平成３０年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	30K10	氏　名	石井　由紀
研究主題 ―副主題―	創造的な読み手を育てるための指導の工夫 ―中学校国語科におけるメディアの活用―		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	矢嶋　昭雄
所属校	世田谷区立深沢中学校	校長	佐野　晴子

キーワード：　メディアの活用

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

平成30年度全国学力･学習状況調査の結果から、中学生の現状として「場面の展開や登場人物の描写に注意して読み, 内容を理解することはできている」ものの「目的に応じて文章を読む際などに、情報を整理して内容を的確に捉えること」や「文の成分の順序や照応, 構成を考えて適切な文を書くこと」に課題があるとされている。このことについて、表面上の読解はできていても、そこから実生活に結び付ける力を身に付けることができていない生徒が多いように感じている。また、多くの生徒が読み取った内容を知識として蓄え、応用することも苦手にしている。

これまで生徒に国語を学ぶ楽しさや大切さを伝えたいという思いで授業に臨んできたが、生徒に生きて働く力を身に付けることが十分にできていないことが課題であった。例えば「読むこと」に関して言えば、正確に読み取ることに重点をおきがちで、生徒自らが読み取る楽しさや考えを深める喜びを味わう機会を設定することができていなかった。新学習指導要領を踏まえると、書かれた文章を正しく読み取る力はもちろん大切だが、その先にあるものを見据えた学習を展開することが必要である。そのため、生徒の実生活につながる「創造的に読む」力に焦点をあてることを考えた。

この「創造的に読む」とは、「文章や図表から自分の考えの形成を図り、他者との交流活動を通して考えを広げ深めること」として捉えることとする。実際の指導においては、文字化されていないメディアを使用することで、自分の考えや思いを自由にもつことができるのではないか、文字だけに限らず様々な場面で創造的に読む力を身に付けることができるのではないかと考えた。

２　研究の内容・研究の方法

先行研究にあたり、文字化されていないメディアについてその可能性を探る。そのことを踏まえて、実際の授業で使用する教材を選定する。

都内公立中学校の第２学年の生徒を対象に、国語の学習や授業に関する意識調査を行う。

また、基礎研究を元に選定した教材を用いた授業案を作成し、授業を実践する。

さらに、授業後に再度意識調査を行い、事前事後の比較から生徒の変容を読み取って考察する

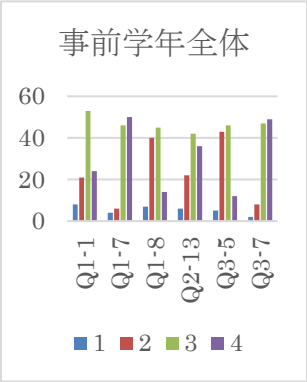
都内公立中学校において、第２学年の３クラスを対象として研究授業を行った。授業の中で、生徒が「創造的に読む」ことに取り組めるよう選定したメディア教材を活用することと、４人組による交流活動を取り入れることとした。

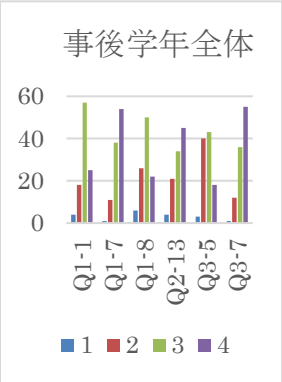
メディア教材については、各クラス５時間ずつ全15時間の授業を行ったが、その都度様々なものを用いることとした。具体的には、４コマ漫画や言語を使用していない短編アニメーション作品などである。このようにしたのは、書かれているものを読み取る力だけではなく、書かれていないことを創造する力を身に付けるためである。

４人組による交流活動については、毎回の授業で実施した。主体的な学習を促す原動力のひとつは、他者に認められることであろう。読み取った自分の考えを他者と伝え合い、比較し、また自分の考えを深めていくという一連の活動が学ぶことの楽しさにもつながると考えたからである。

また、読むことが苦手な生徒は、書くことも苦手な生徒が多い。そうした生徒に対しては、教師が質問を投げかけながら、言葉を引き出していく支援を行うこととした。これは、教師との対話によって、自分の読み取ったことに気付き、言語化するきっかけになると考えたからである。そのサイクルを内在化することができれば、自分一人で深い読みができるようになり、自分の意見や考えを言葉で表せるようになるのではないかと考えている。

３　研究の結果





アンケートは生徒自身の得意不得意やもともとの好き嫌いに影響される部分が多く、全体的に顕著な結果は見えづらかった。しかし、学年全体としては微増ではあるがどの項目も平均値が上がっていた。Q1-1 から、事前アンケートで１と２を選択していた 29 名の生徒が、事後アンケートでは 22 名に減っている。国語に関して苦手意識をもっていた生徒が、減少したことは大きな成果である。Q1-7 の項目は、これからの授業づくりで一番大切な視点である。学習したことが実生活につながっていくためには、生徒自身が学んで役に立つと実感できなければ学習と生活がつながらないからである。この項目では、変化が見られた。事前アンケートで１と２を選択していた生徒が、事後アンケートでは減少している。しかし、Q1-7 と Q3-7 では肯定的な回答がやや減ったことが分かる。これは１組のアンケート結果が大きく影響しており、その変化に平均値が左右されたと考えられる。他クラスで見られた３を選んでいた生徒が４へ移動するパターンではなく、２や１に移動する生徒の数が多かったからである。どのクラスも同じ授業を行ったが、１組に関しては平均値をみると国語の学習が好きだという項目に対して他のクラスよりも低かったことがあげられる。国語が苦手な生徒が、いずれ社会で生活する上で役立つと感じていないことも読み取ることができた。Q2-13 の項目の結果では、他の生徒との交流により気付きや自分の考えが深まったと捉えることができる。考える時間を十分にとり自分の考えや意見を人に伝えることで、自分の考えや意見に自信をもつ生徒が多くなってきたのではないかと考えられる。Q3-5 の項目では、学年全体として言語化されていない作品を扱った効果により、細部にまで着目して読むよう意識するようになったのではないかと考えられる。

４　研究の考察

研究の考察は、アンケート（第１時と第５時）と研究授業の振り返りの記述を基に行った。分析の結果、次のようなことが分かった。メディア作品を扱うことにより国語に対する関心や意欲が向上し、細部の読み取り、日常生活とのつながりを生徒自身が実感することができたと考えられる。また、研究授業を行ってメディアを活用した指導をすることにより、生徒はこれまでよりも自分なりの考えに自信をもつようになった。さらに、その考えを他の生徒に伝え合う中で自分の考えや意見を再構築することができ、深めていくことができた。

言語化されていない作品を扱うことで、言葉の一部分だけを読む傾向がある生徒たちに、文章や図表の全体の文脈を捉え、文脈の中での言葉を意味付けしたり関係付けをしたりしていくことは大切な学習内容になるはずである。そして、それは国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである読書につながると考える。

５　今後の展望

考察から、ねらいに沿ったある程度の生徒の変容は明らかになったが、国語科におけるメディア作品の活用が創造的に読む力を育てることに有効であったか、自分自身の実生活につなげていくという新たな視点で読みの目的意識が生まれたかについては、まだ明らかにすることができていない。今後継続して実践を重ねていきたい。

言語教材を「創造的に読む」ことと、図像や動画等を「創造的に読む」こととの違いは何かということについてもう少し詳細にしておく必要があると考えている。

また、第２学年を対象に行った研究授業であったが、今後は第１学年から第３学年まで３年間の長期的視点で年間指導計画の中にメディア教材の活用を位置付けていくことが必要である。その点を意識して、効果的にメディア作品を扱った授業を行うために、教材開発を行っていきたい。メディア教材を用いた指導の在り方と良質な教材選定が重要である。生徒間交流の際の効果的な教師の発問と、生徒の意見のまとめ方も今後更に学び続けていきたい。